藪椿（やぶつばき）

木枯らしは木々を丸裸にし、山道を落葉で埋める。散歩の途中それをガサガサと踏みながら、子どものころの自分を思い出していた。

落葉に埋まる急坂を、手製の橇（ソリ）で滑り降りた愉快な思い出、家族の不和に心を痛め、林道の落葉上を歩いた苦い思い出などである。

心の奥底にこびりついた無数の記憶は、様々な刺激、…たとえば「落葉の道を歩く」などといった刺激によって瞬時に解凍され、時にはおぼろげに、また時には生々しく蘇える。

わが国にヨガを紹介した沖正弘氏は「身心のどこかが固くなることが病気の原因」と述べている。しかし、他人のことはともかく、自分の心身の固さを自覚するのは難しい。昔、「頭がわれるほど痛くなることがある」と訴える同僚がいた。彼は受診する時間さえ惜むほど多忙だったが、頭痛が重大な病気の前兆ではないかと不安に駆られて受診したところ、原因は肩こりと判明し大笑いになったことがある。こんなふうに、肩こりさえで自覚するのが難しいのだから、心の固さとなると、その自覚はもっと難しくなる。

親子喧嘩がきっかけで一年以上も口をきかないというケースが稀にある。これは「アイツには負けられない」と、勝負にこだわる心の固さが原因だ。東大を受験し続け、十回目の不合格が判った時自ら命を絶った男の話を聞いたことがある。東大を目指す不屈の精神と言えばカッコイイが、ベストにこだわり過ぎて、目標をベターに修正する柔軟さを欠いたことが、この男を追い詰めたという見方もできる。

その他、学校でいじめを受けた人が、十年も復讐を考え続けるという事例もある。この場合、復讐にこだわる自分が好きになれず、そのことでも苦しむのだが、それでもなお、復讐心を捨てることができない。傷つけられることが、どれほど心を固くするかを理解する分かりやすい例だ。

人間関係で生じた傷（人間不信という固い心）は、「温かな人間関係の場」でなければ癒されない。「固くなった心」に悩む多くの人々と出会う私は、いつの間にか、その場を用意することが自分の仕事と思うようになった。

だからカウンセリングを続けるうち、しだいに心が柔らかくなり、状況に応じて、心が転がるように「ころころと」変わっていく姿を見させてもらう時が、私の最も嬉しい瞬間である。「心は、ころころと、転がるから、こころなんです」…　これは最近の私の口癖である

山村が故郷の私は、実家周辺の山や谷、ため池や田畑のあぜ道をよく歩き回った。その中で最もよく心に思い浮かぶのは、竹藪の南端の陽だまりに咲く藪椿の姿だ。春が待ち遠しい暖かな日は、理由もないのに何か良い知らせがあるような気配を感じ、赤い自転車に乗った郵便屋さんを待ったものだ。しかし赤い自転車に会えず、それでもその気配が消えぬ心を感じながら竹藪の南まで歩いたとき、藪椿を見たような気がする。

貧しい子ども時代だったが、いまだ藪椿を愛する心と「良い知らせ」を待つ心を忘れぬ自分をほめてやりたいとふと思う。今も未熟で生臭い私だが、その点では良い育ち方をしたものだ。

落葉を踏みながら家族の不和に心を痛める子どもの私が、今もなお心の中に生きているのも事実だが、その影と表裏一体の陽だまりの椿が今も心の中にあり、生きる力を与え続けているのも厳然たる事実だ。私を育んでくれた今は亡き父母や故郷、またその後の私を育ててくれた多くの人々に改めて感謝したい。

二〇一〇年十二月

学校カウンセラー　森口　章